

# 治水と環境を両立させる 21世紀の河川事業に直言

聞き手・構成 ルポライター 滝川 康治

も反対しつづけたわけですが。良かったのは、政界が動くのではなく、市民運動としてやれたことですね。計画が正しければ認められてしまうかもしれませんが、やっぱり正義は勝つということで、無理な計画はしよせん無理なんです。大変だったけれど、反対しつづけたことに意味があったと思います。「なぜ、そんなに時間がかかったのか」というと、開発局が情報公開や住民参加をしなかったことに根本的な原因があります。もっと早くそれをすれば早く決着がついていたわけです。開発局の責任は非常に大きい。今後は河川に限らず、すべての計画に対して情報公開と住民参加を求めていかないと、また同じ過ちがくり返されるということですね。

中止後、石狩川と千歳川の合流部開発が論議されていますが、小野さんらは二十一年後は、合流部で大規模な工事を行なわなくても、千歳川流域の総合治水対策（注1）を実施するだけで、過去最大だった八一年規模の洪水は十分に防げる」と主張しています。回石狩大橋地点の基本高水流量（注2）を「毎秒二万八千トン」と設定していますが、総合治水対策を実施すると毎秒二万三千八百トンまでの流量を処理できる。これは、八一年洪水時のピーク流量の二万三千八トンを上回る。したがって、流量設定を要するだけで江別市内での石狩川の大規模な河道移設は必要なくなる、という指摘でした。



▶千歳川放水路の是非を議論したワークショップ  
サール条約国際会議(83年、釧路市内で)

蛇行した川を直線化したり、コンクリートで固めながら洪水を一気に海へ流すことに偏重してきた河川政策が変わりつつある中で、これからの公共事業をどう転換していったらいいのか——。千歳川放水路問題などに取りくみ、川とのつきあい方を考えてきた北大教授の小野有五さんにインタビューし、具体例を踏まえて提言してもらった。

対し、また膠着状態になります。「毎秒二万六千トンとか二万四千トンならどうか」という代替案をいくつも出す——行政のやるべきことは、これだと思つてですよ。そうすると早く着ていけるし、みんなが満足できれば話が早くまとまるわけで、一部に無理を押しつけることは絶対にできない。いくつもの代替案を出すのが行政の役割であって、それを求めていくことが大だと思つています。

「百五十年に一回の洪水（注1）石狩川の場合」といった確率計算を基に工事をする手法自体を変える必要があるのでは。

小野 百五十年に一回でもいいんですが、基本高水流量は計算したら二万トンから一萬八千トンまで数値が出るんだから、少なくとも行政は何通りかのメニューをまっとう用意して、「この場合だったらこうです」という選択の余地を住民に託す。行政が一方的に決めてしまつて、「さあ、これやれ」と言うのではどうしようもない。そこなんです。ダムによる洪水調節の話でつづけて、同じことがすべてに当てはまる。



北大教授 小野有五氏

（おの・ゆうご）1948年東京生まれ。東京教育大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。水河を研究し、水河時代から現在までの山の自然史を探る。80年代半ばに北海道に移り、現在は北海道大学大学院地球環境科学科教授。学生たちに環境問題を教えるかたわら、「北海道の森と川を語る会」や「とりかえそう北海道の川」実行委員会」の代表として、河川事業のあり方について発言している。主な著書に「北海道の自然史」（共著・北大図書刊行会）「北海道 森と川からの伝言」（北海道新聞社）「川とつきあう」（岩波書店）「自然をみつめる物語」（同）などがある

「隠そうとする」のではなく、いくつかの案をきめ細かく想定してこなつたのが実態ではないでしょうか。小野 というよりも、開発局は事業を大き

# 「河川の自然復活へ 大胆、多様な試みを」

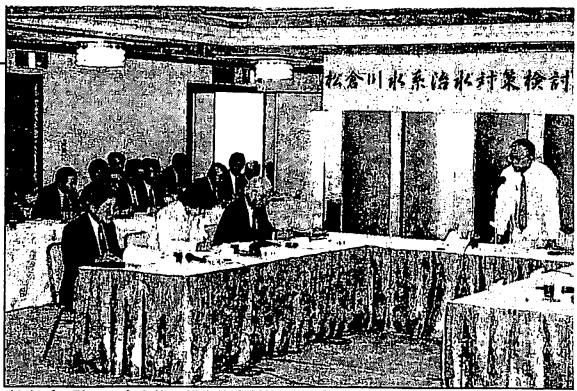
放水路で問われた  
情報公開と「参加」

十七年間におよぶ論争の末、一九九九年に千歳川放水計画の中止が決まりましたが、この長い経過のなかから、わたしたち道民は何を学ぶことができるのでしょうか。

小野 この計画は、千歳川流域の洪水を防止する上ではある程度の効果があるけれど、反対に若小牧や早来など洪水とは無関係だった地域に洪水時の濁流を持ち込み、大谷峠沿岸の漁業に致命的な打撃を与えます。また、ラムサール条約指定地のウトナイ湖と、美々川の自然環境が大きく損なわれます。にもかかわらず地元住民や漁業関係者に知らされないまま、北海道開発局のなかで秘密裡に計画が策定され、河川審議会（建設大臣の諮問機関）で一方的に決定されてしまいました。つまり、計画自体が非常に無理なものでした。それに対して、漁民や自然保護団体はもちろん、「無駄な公共事業だ」といって市民

特別インタビュー

る講演会！  
上の問題  
講師小  
ルギー政策  
謝



松倉ダム計画の中止後、総合治水対策をめざして検討会で議論がつづく(2000年5月、函館市内で)

「を作れ。我々は、そのなかから選ぶ」ということにはなないと思います。

小野 「いろいろな議論がありました。遊水地の候補地や洪水の被害個所など現場でも少し議論したならば、違った展開になったのではないかと、とも思っています。」

小野 「それができれば、一番良かったけれど、向こうはそれは乗らないですね。特に遊水地は地権が絡むので、開発局も地元も警戒する。」「俺のところは勝手に遊水地にされたら困る」とかね。僕も、勝手に人の土地を遊水地とは言いえないから、地図上では提案するけれど、ちょっと厄介なところはありました。長沼町の一部ですが、千歳川とは関係ない窪みだところが一番被害、遭って、水に浸かってしまおうという事実がありました。現場に行ってみれば放水路をいくら造ってみてもダメだと分かるわけで、そういうのは是非やりたかった。ただ、検討委員会(知事の諮問機関)の段階で初めて委員の皆さんに行ってもうたことはありますけどね。」

小野 「流域自治体とは「すべて開発局にお願います」という姿勢がありますが。」

小野 「もう、そういう時代は終わりました。あくまでも「自分たちがとるんだ」と考えて、自治体なりに調査してほしいけれど、国からの交付金に依存して開発局に肩突かないという悪い伝統もあります。国土交通省になっても河川は開発局だから、どこまで自治体が独自の案を出せるかです。それはいいかな。」「行政の責任」と言うけれど、最後は市民の責任になってきます。」

小野 「彼らは架空のものから考えているので、「実績から考えよう」と言っている。行政側も実績を基に数字を出して、史上最大洪水を基本に治水対策をやればいいのか、それ以上のあまり高い治水施設は際限もないし、財源がないのだから止めよう、ということ。」

小野 「市民も被害者側などをあまり知らない。体験した人は分かるかもしれませんが。」

小野 「洪水被害の実態から物事を考えるところから出発していないのが、一番の問題じゃないですか。」

小野 「彼らは架空のものから考えているので、「実績から考えよう」と言っている。行政側も実績を基に数字を出して、史上最大洪水を基本に治水対策をやればいいのか、それ以上のあまり高い治水施設は際限もないし、財源がないのだから止めよう、ということ。」

小野 「市民も被害者側などをあまり知らない。体験した人は分かるかもしれませんが。」

小野 「洪水を体験した人ほど「過去最大の洪水を防いでくれ」としか言っていない。行政側は勝手に数字をうんと吊り上げて、そこで住民とずれてしまっている。そして「放水路やダムができないと、またあの洪水がくるよ」というような言い方を。ところが、そうじゃない。あくまでも過去の最大洪水を議論の基準にして、「防げるかどうか」で議論するほうがすっきりする。」

小野 「平取ダムの問題でも、確かに日高は道内でも雨は多いんですが、基本高水流量がものすごく高く設定されている。」

小野 「行政に対して市民は何を言っていけばいいんでしょうか。」

小野 「史上最大の洪水がダムで防げるのか、そのうえで、どれくらい流量を嵩上げしているのかはつきりさせる。市民も、もう少し勉強しなければいけません。」

小野 「当別ダムの目的には、洪水調節もありますが、水道用水のウエイトが高いですね。」

小野 「行政に対して市民は何を言っていけばいいんでしょうか。」

小野 「史上最大の洪水がダムで防げるのか、そのうえで、どれくらい流量を嵩上げしているのかはつきりさせる。市民も、もう少し勉強しなければいけません。」

小野 「当別ダムの目的には、洪水調節もありますが、水道用水のウエイトが高いですね。」

小野 「行政に対して市民は何を言っていけばいいんでしょうか。」

## 実績洪水をもとに ダム計画の検証を

道の「時のアセスメント」で函館の松倉ダム計画が中止になりました。何度か取材したんですが、道は再評価の過程で意見交換会や説明会をやりました。きこちなかつたけれど担当者も情報を提供して一生懸命やっていた。そのあたり、どう思いますか。

小野 「道の「時のアセス」の対象にしたことは大ヒットです。松倉ダムも本当に必要な理由がなかったわけで、本当に必要なダムならば行政マンは頑張ると思う。でも、「ダムはいらないのか」と突き詰めた、いいないわけですね。だから「時のアセス」もできた。」

小野 「行政マンとしても、本当に造ろうとしたダムではなかった。」

小野 「そう。例えば、僕は「千歳川放水路はいらん」と思ってた。千歳川放水路はいらん、行政側だって本当に必要だと思えばやるでしょう。松倉ダムも無理があつて、人口がどんどん減っているのに水需要が伸びるといふ数値を平気で出しているわけで、あまりにお粗末です。それと同じようなことが、サンルダム(下川町)や平取ダムなどでもやられている。」

小野 「松倉ダムでは中止後、市民の代表と専門家によって二つの検討会をつくり、「川だけでなく、面的に総合治水をやる」という合意の下で議論を

進めている。こうした新しい試みを生み出したことで、今後の河川公共事業のあり方に一石を投じたように思います。」

小野 「行政の人が出てきて直接市民と対話したのは、おそらく初めてでしょう。そうしたことができた、という意味では良かった。」「松倉ダムは小規模で、「時のアセス」もあつて中止しやすく、道庁も中止に至る過程を一つのモデルにしたかった。その一方で、道内ではたくさんダム計画が進んでいます。」「例えば札幌圏の人たちは夕張のシューパロダムにはあまり関心がない。あのダムは、貯水庫が日本でも十本の指に入らうのに、今あ

進めている。こうした新しい試みを生み出したことで、今後の河川公共事業のあり方に一石を投じたように思います。」

小野 「行政の人が出てきて直接市民と対話したのは、おそらく初めてでしょう。そうしたことができた、という意味では良かった。」「松倉ダムは小規模で、「時のアセス」もあつて中止しやすく、道庁も中止に至る過程を一つのモデルにしたかった。その一方で、道内ではたくさんダム計画が進んでいます。」「例えば札幌圏の人たちは夕張のシューパロダムにはあまり関心がない。あのダムは、貯水庫が日本でも十本の指に入らうのに、今あ

進めている。こうした新しい試みを生み出したことで、今後の河川公共事業のあり方に一石を投じたように思います。」

小野 「行政の人が出てきて直接市民と対話したのは、おそらく初めてでしょう。そうしたことができた、という意味では良かった。」「松倉ダムは小規模で、「時のアセス」もあつて中止しやすく、道庁も中止に至る過程を一つのモデルにしたかった。その一方で、道内ではたくさんダム計画が進んでいます。」「例えば札幌圏の人たちは夕張のシューパロダムにはあまり関心がない。あのダムは、貯水庫が日本でも十本の指に入らうのに、今あ

進めている。こうした新しい試みを生み出したことで、今後の河川公共事業のあり方に一石を投じたように思います。」

小野 「行政の人が出てきて直接市民と対話したのは、おそらく初めてでしょう。そうしたことができた、という意味では良かった。」「松倉ダムは小規模で、「時のアセス」もあつて中止しやすく、道庁も中止に至る過程を一つのモデルにしたかった。その一方で、道内ではたくさんダム計画が進んでいます。」「例えば札幌圏の人たちは夕張のシューパロダムにはあまり関心がない。あのダムは、貯水庫が日本でも十本の指に入らうのに、今あ

進めている。こうした新しい試みを生み出したことで、今後の河川公共事業のあり方に一石を投じたように思います。」

小野 「行政の人が出てきて直接市民と対話したのは、おそらく初めてでしょう。そうしたことができた、という意味では良かった。」「松倉ダムは小規模で、「時のアセス」もあつて中止しやすく、道庁も中止に至る過程を一つのモデルにしたかった。その一方で、道内ではたくさんダム計画が進んでいます。」「例えば札幌圏の人たちは夕張のシューパロダムにはあまり関心がない。あのダムは、貯水庫が日本でも十本の指に入らうのに、今あ

進めている。こうした新しい試みを生み出したことで、今後の河川公共事業のあり方に一石を投じたように思います。」

小野 「行政の人が出てきて直接市民と対話したのは、おそらく初めてでしょう。そうしたことができた、という意味では良かった。」「松倉ダムは小規模で、「時のアセス」もあつて中止しやすく、道庁も中止に至る過程を一つのモデルにしたかった。その一方で、道内ではたくさんダム計画が進んでいます。」「例えば札幌圏の人たちは夕張のシューパロダムにはあまり関心がない。あのダムは、貯水庫が日本でも十本の指に入らうのに、今あ

沙流川水系では二風谷ダム(写真)の上流に平取ダムの計画が取り沙汰されている



とが出来ないのかな」と思ってしまう。小野 「あれが限界で、低水路だけでは無理なんです。堤防から堤防の間をもう少し変えたり、いざというときは川をあふれさせたり、いざというときは北海道は遊水地になり得る場所がいっぱいあるわけだから、年に一回だけあふれたって補償すればいいわけ。工事をお金よりも安いね。もう少しそちらへ進まない、小手先でいじくり回しても、あれが限界だと思えます。」

小野 「AGS事業(注4)の事例集を見ると、木で護岸を造ってみたりしていますね。」

小野 「まずいのは、川の個性がなくなっていることです。どこでもAGSと分かるようなやり方では、むしろ川の個性を殺していることになる。どうしても改修せざるを得ない場所であるのはいかにもしれないけど、今はパターン化してしまつて、かえってます。」「発想を変え、川は自然にしておいて、まわりを買い取ったり、遊水地を造るなりして、あふれてもいいように変えていくほうがいい。そういう大胆な試みをAGSのなかに入れるべきです。」

小野 「護岸を階段にしたりしていますよね。小野 「それはもうやめてほしい。」

小野 「カワセミ護岸の事例もありますが、コンクリートに穴を開ければいいという発想ですが、まわりの木を伐つてしまつたら、果は確保できても、カワセミが留まる場所がなくなればどうしようもない。「カワセミが羽を休めるためには、どれだけの自然がまわりを確保した」という短絡的な発想でしょ。」

小野 「護岸を階段にしたりしていますよね。小野 「それはもうやめてほしい。」

小野 「カワセミ護岸の事例もありますが、コンクリートに穴を開ければいいという発想ですが、まわりの木を伐つてしまつたら、果は確保できても、カワセミが留まる場所がなくなればどうしようもない。「カワセミが羽を休めるためには、どれだけの自然がまわりを確保した」という短絡的な発想でしょ。」

小野 「護岸を階段にしたりしていますよね。小野 「それはもうやめてほしい。」

小野 「カワセミ護岸の事例もありますが、コンクリートに穴を開ければいいという発想ですが、まわりの木を伐つてしまつたら、果は確保できても、カワセミが留まる場所がなくなればどうしようもない。「カワセミが羽を休めるためには、どれだけの自然がまわりを確保した」という短絡的な発想でしょ。」

小野 「護岸を階段にしたりしていますよね。小野 「それはもうやめてほしい。」

# 市民が改修に異議 真狩川からの教訓

——真狩川の問題では、反対運動はしないという原則の「北海道の森を川を語る会」が、一九四四年に原則を破って改修に異議を唱えた。その後、その後の事業が全面的に見直された経緯があります。改修済みの区間は、オンヨロコマが産卵しやすいように砂利を入れたり、河床を強化するなどの手直しもなされました。現場を見学機会があったのですが、かなり不自然な状態に戻ってきていますね。

小野 戻って来たけれど、自然空間に比べると、またオンヨロコマの産卵床は少ないんです。



市民団体の要請で減流部の工事が中止された真狩川。写真のように大きな石を置いて流れては元々の状態に近い状態に近づいてきたところも

そういうのは限界だということですよ。——同じ予算を使うのなら大胆に転換してください。

小野 そうですね。今は天下りの業者に発注しているわけだから、それをやめない限りは止まらない。遊水地にするだけでも工事はできるわけで、それでいいのですが、とにかく天下りを断たないとね。

——改修の見直しを求める活動のなかで、一番感心したのは何ですか。

小野 反対運動に対して開発局がまともに対応してくれた、ずいぶん進歩したな、と感じましたね。しかし、最初の計画があまりにひどい内容でした。農家が四十くらいいて、洪水警報もほとんどないのに、真狩川というのを農用排水路と評価していた。源流の泉に近い所、なぜかだけの大事が必要だったのか。それに、改修後の河床に大きな石を敷き詰める必要があったのか。やはり計画そのものの問題がありました。

——農業の事業ですから、村も事業を申請したんじゃないですか。

小野 地元が要請があったから事業をやる、というパターンですからね。手つかずの自然を売り物にするべき村なんてすげえだ。

——そういう発想が真狩川になかったんですよ。運動に立ち上がったのは、工事がかなり進んだときでしたね。

小野 そう。仕方がないからオンヨロコマに適した細かい砂利を川に入れてもらった。「全部入れ替えてほしい」と言っただけですが、それは無理なので後から入れて、それがけつ

こう再配分されて安定したんですが。——流れに変化を持たせたことで良くなった面もありますね。

小野 そうですね。でも、一番良かったのは、源流部の工事を凍結したことですよ。あのまま事業を継続していたらおしまいでしたから。いくつもの落着工(注1)や木を残す、すべてを完全にみるわけではありませんが、本来の工事はいらなかった。財政がきびしくなっていくときに、「本当にいいのか、いらないのか」をきちんと判断できるようにしないと、無駄な事にお金をかけることになるだけですからね。

——村のなかから賛同の聲を出しているところから、市民が問題提起する貴重な例をつくったわけですね。ただ、真狩川ほどでなくとも、いろいろな問題があります。

小野 北海道の場合、土地がいっぱいあるし、人口が密集していないので、治水対策として、思いこむのは遊水地を造ることで。遊水地化の工事で地元からいらいとカネが落ちるし、最低限、地役権(注6)を設定する、あるいは地役権プラス災害補償を取れば農家にも補償が大きくなるわけですよ。そうすると、行政側も予算規模を確保できるメリットが生まれるし、ほとんどの被害者がカバールです。

千歳川でも、初めは遊水地の「ゆ」の字もなくて、最初僕が言い出した時にはみんなボカソとしていた。「開拓以来の土地を水に浸けるのか」と言われたんですが、「そんなの本州では当たり前じゃない」と、すく切

元に戻していい。——そういうことが長い目で見たら出てくると思っただけです。イチヤニ(サケマス産卵場の意)なら産卵床がなければならぬ、コンクリートになつてくれば、そういうのが少くも出てくれば、長い目で見ると自然復活につながると思うし、何よりも市民に対する感謝の礼儀です。もう一言言わせてください。いかにアライ語の復活は難しい。地名から入るが、いいのではないかと。——河川復元に向けた公共事業のソフト部分の「つ」とい見方です。

小野 そうですね。看板を立てるだけで、啓発になります。また、開発局では助産婦を復活させようとしています。舟運は蛇行河川のほうがいい。今でもショートカットしたのを、もう一度船を取り戻せば石狩川だとしてよく良くなる。公共事業のソフト部分には、いろいろなやり方があると思います。

——画一的な事業に批判し、北海道の川を復元する二十一世紀にしたいですね。本日はありがとうございました。

# 復元可能な河川はまだまだ沢山ある

——来年度、開発局は標津川で蛇行区間の復元事業(注1)を実施することになりましたが、こうした試みをどう評価されますか。

小野 かなり多額の工事費になるので驚いたんですが、こうした事業が一つでも成り立っては、いい突破点になると思います。北海道では、これから二十年くらいのスパンで土建屋さんを減らさなければならぬわけですから、こうした事業で食い足りないなら、その間に他のものに転換していく。構造改革が必

要ですから、変な事業をやるよりも、ずっといい。

——蛇行の復元で河川畔林を産卵床にするという計画でした。

小野 引き堤(注2)しきすから、その分だけ河畔林が増えるわけです。

——あちこち川を見たら、復元可能な川はまだありますよ。

小野 いっぱいありますよ。標津川に関して、天塩川もたくさん旧河道があるのを見て、それを遊水地化して、同時に蛇行を復元してあげたい。越前(注3)にして、一時的に水が入るようになれば大した工事はいらしません。それをしんどくやればいい。

——開発局はなぜ、蛇行復元事業をやろうとしたんですかね。

小野 向うにも考える人がいて、市民からも支持されるし、そのすれば、概して予算基準(注4)大蔵省を通って事業を確保できるからです。口では言わないけれど(笑)。——「開発局はなぜ、蛇行復元事業をやろうとしたんですかね。」

——そうした事業は必要ですか。道の土木課が河川事務所が復元事業を試みている。標津川も見学もしてもらって、いろいろやっているけれど、チマチマして、小野 河川のなかでチマチマした事業をやっても限界が思える。むしろ、まわりをドーンとやっつて、「あふれてもいいよ」という形にしないと無理なんです。

——最後に、アイヌ語で川の名称を指示していく運動もされていますか。

小野 アイヌ新法が制定されて一年たつたけれど、日常のなものが何も変わっていない。日常的な形でアイヌ文化が見えてくると、ならない意味がない、と思って九八年から始めたんです。

——それ以前から道庁はアイヌ語の表示をやっていましたか。

小野 それかひじかた。まず日本語地名を大きく書いて、「由来はこうだ」と小さくアイヌ語地名を書く。「正式な地名はあくまで日本語です」と押しつけているわけですよ。僕らは「今までの日本語の地名もいっしょに、アイヌ語の地名もあるんだから、同じ大きさで併記してほしい。アイヌ語の意味も書いてほしい」という意見なんです。

——成果はありますか。

小野 道の標津のなかで「アイヌ語地名を尊重する」というのを入れることができた。今は、個々の自治体でそれを具体化する段階です。旭川市では検討委員会をつくって、二〇〇一年に二回議論し、二〇〇二に二回具体的に具体化させます。アイヌ語は全部いっぺんにできないですが、確かなものから始めていこうとしています。

——併記することで、市民が行政が川の元の姿を知っていく、というわけですね。

小野 チライベツ(アトウ、川の意)だったら、イトウがいるというのが、みんなに分かる。漢字で「知魚川」であつたらいいけれど、今はイトウがない。と、「じゃ、なせなだ」となると、改修してきたからで、

(注1) 総合治水対策、河川施設による洪水被害の軽減には限界があるため、遊水地や雨水の処理、浸透施設などによる流域の面的整備と併せて治水対策を講じようとする手法。

(注2) 千歳川流域では、遊水地や調整池などの設備が検討されている。昨年十二月十九日の河川審議会が正式に答申された。

(注3) 基本高水流量、想定した規模の雨が流域に降ったとき、モデル計算を基に、河川にどれくらいの水が出るかを算定して求めた

河川流量のこと。マニュアルに沿った机上の試算なので過大な数値が設定される傾向が強い。この数値を基に各河川で治水工事の計画が立てられる。

(注4) 高水敷、常に水が流れている低水路より一段高部分の敷地のこと。

(注5) AGO事業「魚」島一人にやさしい川(つ)をキャッチフレーズに開発局が取りくんでいる河川事業 Aqua Green Strategy(アウア・グリーン・ストラテジー)の略。護岸や魚道に丸太を使う、河床に自然石を並べる、魚巣(フロンク)を置く、ワンドを造る、など、さまざまな手法を試みている。

(注6) 河床の勾配を緩和するために設ける段差のある構造物。

(注7) 地役権補償、国などが農地を遊水地として借り上げたとき、通常は農地として利用し、洪水時には遊水地としての活用するために行う、補償のこと。本州の遊水地は一般的に行なわれている。

(注8) 引き堤、既設の堤防を川の側面に移動させること。

(注9) 越流堤、洪水調節の目的で、堤防の一部を低くした堤防。越流堤の高さを越える洪水では、ここから洪水の一部が遊水地や調整池に流し込む構造になっている。